

「夢の」第49回全国公立学校難聴・言語障害教育研究協議会全国大会岡山大会に寄せて

通級指導教室で指導・支援を行う担当者として大切にすべき専門性とは

岡山県津山市立北小学校 吉田 英生

新型コロナウイルス感染症の影響から本大会が中止となりましたことは、大変残念です。全国から日々、真摯な実践をされておられる先生方が参集し、今、学校ではどのような子どもの課題があり、どのような教育実践がなされているのかを、発表を通して、参加者一人一人が考え、明日の実践へ生かすヒントを見つける貴重な機会を見送らざるを得ませんでした。

しかし、機関誌「きこえとことば」の中での誌上発表ができることに、全難言協事務局、そして、大会実行委員会の先生方に感謝申し上げます。

さて、人が集い、そこでの出会いは、自分一人では見つけられなかった夢のような世界が広がることもあるものです。

貴重な紙面をいただきましたので、通級指導教室を10年間担当した経験を振り返り、通級担当者の「専門性」について考えてみました。

通級指導教室で出会う子どもとその保護者は、「できないこと」があって教室の門をたたきます。「できないこと」により、「生活上の困難」や「学習上の困難」を生じることとなり、教室で学ぶことに難しさを感じたりとか、友だちとの関係に苦しさなどを感じたりすることが多くなります。

通級指導教室での教育実践は、「『できない』から始まる教育」です。

しかしながら、現実にある子どもの「できないこと」だけに目を奪われてしまわないことはとても重要です。出会った一人の子どもには、夢もあるでしょう、好きなことも、得意なこともあるでしょう、日々何かを楽しみにして暮らしてもいるでしょう。

通級指導教室の担当者は、できないことだけに目を奪われず、できることや好きなことも知った上で教育実践にあたってほしいと思います。

私は発達障害「学習障害等（読み書きの困難さ）」に関する指導・支援」分科会のコーディネーターです。私が出会ったディスレクシア（読み書き障害）がある児童のことをお伝えし、先生方の今後のご実践のヒントにさせていただければ幸いです。

専門性その1 想像力

子どもたちには、それぞれの日々の暮らしがあります。文字が読めない困難さは、その子どもの暮らしにどのような影を落としているのでしょうか。

私が、15年前に通級指導教室に赴任し出会った3年生は、おしゃべり好きで、計算は速くでき、運動も得意でしたが、漢字は何一つ読めず、書くこともできませんでした。

想像してみましよう。通常の学級で教科書を開き、毎日学んできた2年間の大変さはいかばかりであったでしょうか。この子どもは、私が赴任する半年前の9月に通級指導教室の教育相談を

受けていますが、半年間は通級指導を受けることはできませんでした。制度や担当者の都合が通級指導教室に通うことの壁となったのならば残念なことです。想像される日々の教室での困難さを軽減するために、出会った「今」からニーズに応じた教育の機会につなげる熱意が担当者には必要です。その熱意は、この子どもへの指導方法を創造するエネルギーにもなります。

右の写真は、その子どもがモコモコペンで書かれた漢字を手で触わり、触覚から文字の形を学んでいる場面です。3年生なのに、習っていない「丸・橋・吉」などの文字が、なぜあるのでしょうか？

この子は、学級での暮らしにある「配りもの」という係ができませんでした。漢字がわからなくて、正確に友だちのノートを配ることができないので、それができるようになることが「夢」の一つだったのです。だから、初期の指導で、身近な人の名前に使われているこれらの文字を意欲的に覚えようとしていたのです。

通級指導にあたる時、その子どもの教室での様々な場面が皆さんは想像できますか？その場面で棘のように刺さっている「困難さ」を乗り越えるための力を育む指導方法を創造することができますか？指導法の開発「創造力」も大切な専門性ですね。

『この子のため』から新しい実践は生まれます。

専門性その2 行動力

子どもの暮らしや学校での学び方を実際に見聞することも大切です。想像していたこと以外の「困難さ」を発見することができるのがしばしばあります。

在籍校の担任と電話で話す、学校を訪問し授業を参観するなどの時間をつくり、自分から動くのです。「自発的に動くことができる行動力」、これが2つ目の専門性です。

気がついたら動く。

必要だと感じたら動く。

教えを乞いに動く。

その行動力は、在籍校との行き来だけの話ではなく、教育実践を広げることにつながるはずす。

ディスレクシアの2年生の在籍校での授業参観をさせてもらった時に気づいたことがありました。その授業は、テストの時間だったのですが、テストができて余った時間は学級文庫を読んでよいことになっていました。彼は、教室の後ろに置いてある絵本を手に取り、絵だけをながめてページをパラパラとめくっては、席を立ち、次の絵本を手にとり、絵だけ見ては本を次々と取り換えていました。読むことができない子どもにとっての余った時間の過ごし方にも、担任の配慮と工夫が必要であることに気づかされました。学級文庫に置く本を地図や写真集に広げたり、迷路のプリント、写し絵などをさせたりしてもよいかもしれません。通級指導では、この子どもの好きな何冊かの絵本に頻出する単語を読む練習をしました。それだけでも、ながめるだけの絵本ではなく、読む絵本が増え、絵本の読み聞かせは家庭での楽しみの時間ともなっていました。



気がついたら教育実践につなげ、子どもの「学習上の困難」や「生活上の困難」を変えるきっかけをつくる、教材がなかったら作る、定められた個別指導計画の様式だけで足らなければ必要な項目を加えて実践をまわしていく、アセスメントの仕方や指導技能を学ぶために足を運ぶなどの積み重ねが教育実践を広げていきます。

アセスメントは大事です。できなさを背景を「特性」から読み取る分析的な目とともに、「できなさ」が崩れている子どもの暮らしの全体性を回復させる俯瞰的な目も必要です。アセスメントは、一人の子ども（家族）のストーリーを読むような全体性＋一挙手一投足や一瞬を見る分析力です。全体と部分、癒しと鍛錬は両立します。

専門性その3 ポジティブカ

行動すると人とのつながりもできます。通級指導教室担当者は、校内では一人担当であることも多く、悩みや苦勞を共有することができにくいかもしれません。3つ目の専門性は、そんな孤立感に耐える「忍耐力」ではなく、どのような環境であろうとよさを感じられる「ポジティブカ」です。

一人だからできないこともあるでしょうが、一人だから自由に実践展開ができる。あなたの「得意」を活かしましょう。子どもの「好き」を共有しましょう。子どものことを考えていれば、「一人でもやろう」とエネルギーが湧いてきます。

「一人の大きな一歩より、みんなの小さな一歩」って言いますね。全難言協は、「はじめの一歩」研修会で、全国の「一歩」を集めて、今後の人たちにもつなげようとしています。最初は、ディスレクシアの指導を五里霧中のように感じてよいのです。そこにいる子どもへの最適の指導のヒントが今はネットの中にもいっぱいあります。動きましょ、創りましょ、笑顔で子どもを迎えましょ。

教育実践は、まず子どもや保護者の今の暮らしや学びの難しさと「同行」することからです。実践の課題やわからないことは、次々と出てきますが、出てきたら一つ一つについて自らが学ぶことを繰り返すのです。専門性として、学習障害についての知識や技能があることが大切ですから、本を読みましょ、研修会に行きましょ。読んで、学んで、常に時代の最先端にも接し、最前線である教育現場で生かしていきましょ。「必ず子どもは育つ」と信じて、その力を引き出すことができる教育的力量を自らが持てるようになることを夢見てください。

私は、「一人の大きな一歩とみんなの小さな一歩」の方が、もっといいと思っています。

私の前には大きな一歩を標された何人もの先生がおられました。ステイホームの今、機会あれば赤茶けた昭和の本を読んでみてください。大石益男先生、伊藤隆二先生、谷俊二先生、糸賀一雄先生…。そこに記されている「言葉」から聞こえてくる心意気があると思います。

私は今年度末で定年退職です。10年間通級指導教室担当をできたことは誇りです。来年からの道はまさに「五里霧中」ですが、私も今までの経験を活かし、学び続けることを夢見て歩みたいと思います。

私の道標となった日本の自閉症療育黎明期を歩まれた十亀史郎先生の言葉を結びとさせていただきます。

「自閉症児を特別なものとして見ることを止めたとき、かれらがよく見えてくるということ」を最後に言うておく」（十亀史郎）「僕が自閉語を話すわけ」片倉信夫著 学苑社 平成6年巻頭言より